

鄧豁渠『南詢録』訳注(四)

宋明思想研究会 荒木龍太郎

はじめに

本稿は「鄧豁渠『南詢録』訳注(三)」(活水日文・第五三・2012)の継続である。前回同様、各条担当者の原稿を参加者で検討し、それを参考にして担当者が作成した。なお本研討会は荒木見悟氏の訳注草稿を適宜参考にして作業を進めた。参加者は以下の通りである。

安部力(北九州高専)、荒木龍太郎(活水女子大学)、牛尾弘孝(大分大学)、鶴成久章(福岡教育大学)、檜崎洋一郎(北九州大学非常勤)、藤井良雄(福岡教育大学)、野口善敬(花園大学)、森宏之(花園大学国際禅学研究所客員研究員)(五十音順)

《凡例》

底本は国立公文書館蔵『南詢録』(「叙南詢録」万曆十五年・李宏甫、「南詢録自叙」嘉靖四四年、「刻南詢録跋語」万曆二七年・何継高)を使用した。

「叙南詢録」「南詢録自叙」の二つの序文、「刻南詢録跋語」以外の本文各条に付した数字は、通し番号である。

原文は原則として当用漢字、常用漢字、新字を用い、書き下し文は現代かな使いとした。

現代語訳は直訳を心がけたが、必要と思われる箇所には「」で適宜補った。

注に引用した書籍については、その初出の箇所¹に版本などを明記した。また大正大藏經・大日本統藏經(卅統藏)についてはそれぞれ「T」「Z」の略号を用いた。

『禅学大辞典』は『禅学』、『禅語辞典』は『禅語』、『中村仏教辞典』は『中村』、『岩波仏教辞典』は『岩波仏教』、『漢語大辞典』は『漢語』、『縮印漢語』、『大漢和辞典』は『大漢』、『中国語大辞典』は『中国語』、『明人伝記資料索引』は『明人』に、『明儒学案』は『明儒』、『荒木見悟』中国撰述經典二・楞嚴經(仏教經典選14、筑摩書房)は荒木訳『楞嚴經』に略記した。

各条の終わりに原稿担当者の名前を付した。

*** 訳注 (四〇条~五五条)

【四〇】

「原文」

専ら煩惱、垢尽理明、此小乗教。煩惱即是菩提、事理混融、此大乘教。只主見性、煩惱菩提俱皆分外、此上乘教。上乘之学、專透性命玄元之一竅、不在神機上幹、不在事情好与不好上幹。

「書き下し文」

専ら煩惱を去き、垢尽き理明らかなるは、此れ小乗教なり。煩惱は即ち是れ菩提にして、事理混融するは、此れ大乘教なり。只だ見性を主とし、煩惱と菩提と俱に皆な分外なるは、此れ上乘教なり。上乘の学は、専ら性命玄元の一竅に透

り、神機上に在りて幹なさず、事情の好きと好からざるとの上に在りて幹なさず。

「現代語訳」

もっぱら煩惱を除去して、「世俗の」垢が消え真理が明らかになるのは、小乗の教えである。煩惱がそのまま菩提であり、事（現象）と理（真理）とが渾然と融合しているのは、大乘の教えである。ひたすら見性を第一にして、煩惱と菩提とがともに自己の本分の外となるのが、上乘の教えである。上乘の学は、もっぱら性命玄元の根源の一ツ竅がに透徹するのであって、神機を働かせて取り組むのではなく、事柄が善いとか悪いとかといったこと（世俗の価値観）を問題にして取り組むでもない。

「注」

性命玄元之一竅〃「性命」は、『南詢録自序』、二〇条、二五条参照。「玄元」は、道家のいう天地万物根源の道。『晋書』卷八七の李玄盛伝に引く「述志賦」に、「玄元を稟けて陶衍し、景靈を承けて冥符に之く（稟玄元而陶衍、承景靈之冥符）」とある。「竅」は、元來、穴の意。『莊子』内篇・齊物論第二に、「大木百圍之竅穴、似鼻、似口、似耳、似枅、似圈、似臼、似洼者、似汚者。」とある。道教の内丹の学でいう最も重要且つ玄妙なツボ。神機〃一条の注を参照。

（鶴成久章）

【四一】

「原文」

自宋以来学孔子的流落情念、学老子的流落法術、学仏的流落空寂。宋儒之学行於世、孔子之教衰。平叔之学行於世、老子之教衰。神秀之学行於世、古仏之教衰。

「書き下し文」

宋より以来、孔子を学ぶ^{もの}は情念に流落し、老子を学ぶ^{もの}は法術に流落し、仏を学ぶ^{もの}は空寂に流落す。宋儒の学の世に行われて孔子の教え衰つ。平叔の学、世に行われて老子の教え衰つ。神秀の学、世に行われて古仏の教え衰つ。

「現代語訳」

宋代以降、孔子を学ぶものは、情念に墮落し、老子を学ぶものは道士の術に墮落し、仏教を学ぶものは空寂に墮落している。宋代儒者の「義理の」学が世に広まって孔子の「真の」教えが衰退した。張伯端の学問が世に広まって「本家の」老子の学問が衰退した。神秀の「漸教」の教学が世に広まって釈迦の教えが衰退した。

「注」

流落＝おちぶれさすらう。 方術＝方士のする術(卜筮・占驗・星相など)。 平叔＝北宋の道士張伯端(九八四～一〇八二)の字。名は用成、号は紫陽。『悟真篇』の著がある。 神秀＝唐代の禅僧(六〇五～七〇六)。大通禅師。河南省の人。菩提達磨を初祖とする禅宗の六祖。禅宗五祖弘忍に参じた。後に則天武后に召されて、洛陽・長安に教えをひろめ、兩京法主、三帝国師となる。慧能の弟子の神会が慧能を正系の六祖とし神秀を北宗漸教と批判した。慧能の南宗禅と対立し、北宗禅の祖とされる。神秀の著に『観心論』、『大乘五方便』、『無生方便門』などがある。その禅風は、南宗禅に圧倒されて宋代以降振るわなかったが、明末に至り頓悟漸修論が盛行するに及び、見直されるようになった。 古仏＝釈迦。(荒木龍太郎)

【四二】

「原文」

一日往探葉品山、論及睡著不做夢的時候。此是沒沾帶去処、言思路絶、烟火泯滅、五丁不能致力、六賊不能窺測。是謂向上機縁、玄之又玄。這個玄機、徹上徹下。所謂神光獨耀、万古徽猷。包含宇宙、照徹今古、天地有壞、渠則不壞、諸仏之妙心。衆生之命脈也。

「書き下し文」

一日、往きて葉品山を探ね、睡著して夢を做さざるの時候に論及す。此れは是れ去処に沾帶するな没く、言思路絶し、烟火泯滅し、五丁も力を致す能わず、六賊も窺測する能わず。是れを向上の機縁、「玄の又た玄なり」と謂う。這個の玄機は、徹上徹下、所謂「神光獨り耀き、万古の徽猷なり」。宇宙を包含し、今古を照徹し、天地壞るる有るも、渠は則ち壞れず。諸仏の妙心、衆生の命脈なり。

「現代語訳」

ある日、葉品山を訪れた際、議論が、眠っているのに夢を見ない時のことに及んだ。これは「自己の」立場に囚われることなく、言葉や思い、「それによって行われる」日常生活がすべて絶え、五丁「のような力持ち」でも力を加えることができず、「眼・耳・鼻・舌・身・意の煩惱を生じさせる」六賊でも推測することができない状態である。これを向上の機縁、「『老子』にある」「奥深い所玄の中の玄」というのである。この玄機は、上下に貫通し、所謂「靈妙な心」のはたらき」がただ輝くだけで、永遠「万古の良策」なのである。「この玄機は、全ての」空間や時間を包含し、見極め、天地が崩壊することがあつても、わたし「渠（＝主人公）」は崩壊することはない。「この玄機は」諸仏や衆生の妙心であり、仏祖よりずっと受け継がれたものである。

「注」

葉品山＝未詳。論及睡著不做夢的時候＝雪巖祖欽（？）（二二八七）と高峰原妙（二二三八～二二九五）の、主人

公についての問答を踏まえたもの(野口善敬「明末に於ける『主人公』論争」九州大学哲学年報・四五・一九八七年)参照。また、洞山良价(八〇七〜八六九)の主人公について述べた偈頌に、「切に忌む、他に従りて覓むるを。迢迢として我と疎る。我今独り自ら往き、処処に渠に逢うを得たり。渠今正に是れ我にして、我今是れ渠にあらず。応須らく(すべ)か 恁麼に会して、方めて如如に契つを得べし。(切忌従他覓。迢迢与我疎。我今独自往、処処得逢渠。渠今正是我、我今不是渠。応須恁麼会、方得契如如)」(『景德伝燈録』卷一五・T51・321)というものがある。この偈頌の「渠」は、「本来の自己」「主人公」の意味。これらのことから、本文中の「渠」は、鄧豁渠自身を意味するのと同時に、主人公の意味と思われる。なお袁宗道(一五六〇〜一六〇〇)は、「鄧豁渠曰、睡著不做夢的時候。此是没沾带去処、言思路絶、烟火泯滅、五丁不能致力、六賊不能窺測。是謂向上機縁、玄之又玄。然人安得不睡時有此消息耶。平坦雖未与物接、然獮猴正醒、却已落寤独頭、非縁未来、但不至東跳西蹠之極耳。故曰、好悪与人相近也者幾希希、人所謂本来人也。」と引いて「睡著不做夢時」についての見解を述べている(『白蘇齋類集』卷一九・読孟子)。また良知現成論の周海門(一五四七〜一六二九)は「嘗觀鄧子南詞録、亦以良知不足了生死(三条)、惟人睡著不做夢の時、方是妙心心脈。是此非彼辺見為崇、卒至枯槁淪陷而無帰。學術之謬、只在毫釐。弁可不蚤乎哉」(『東越証学録』卷一六・寄贈李儲山序)と述べて批判している。去処 立場、見解、究極の趣意などの意。(『中村』二二八頁) 沾帯 附着、牽挂、牽連(『縮印漢語』中三一六八頁)。路絶 道路阻絶(『縮印漢語』下六一一八頁)。烟火 俗世の食べ物のこと。よく道教で用いた語。俗界、人間社会の営み(『中国語』下三五四八頁)。五丁 蜀王の五人の力士のこと。六賊 煩惱を生ぜしめるものとなる眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を賊にたとえた語(『中村』一四五六頁)。玄之又玄 『老子』(第一章)に、そのまま見える。「玄の又た玄、衆妙の門なり」とある。玄機 天意、天機、深奥微妙の義理、神妙の機宜、計策、天賦の靈性(『縮印漢語』上八七五頁)。神光独耀、万古徽猷 『天目明本禅师雜録』卷二

に「古えは、神光独り耀き、万古の徽猷と謂う。此の門に入り来たらば、知解を存する莫し。(古者、謂神光独耀、万古徽猷。入此門来、莫存知解)」(Z70・730)とある。妙心＝思いはかることのできないすぐれた心(『禅学』一一九二頁)。

命脈＝慧命脈絡の意。仏祖の慧命を相続して断絶することのないことをいう(『禅学』一一九六頁)。(野口善敬・森宏之)

【四三】

「原文」

上乘観破性命機関、有情無情、皆所不論、直造仏祖門庭、小乘大乘、皆不屑為此、乃教外別伝、没能所、絶踪跡、超於言語想相之外者也。至哉玄機、妙哉秘義、今之學者、有個道理、有個學的人、人与理為二、則墮兩辺之見。又有一等以世事另作世事、以學問另作學問、幹世事時、黽勉從事、忘了學問、幹工夫時、沈潜理趣、違悞事為。古之人、勤世事者、莫如禹。謂禹必待水土平、然後學、則八年在外、皆苦趣也。當事變者、莫如周公。謂公必待流言止、然後學、則三年居東、皆憂危也。心跡之判久矣。雖久於學問者、未能混融心跡為一、縱横無礙。其弊安在哉。

「書き下し文」

上乘は、性命の機関を観破し、有情無情、皆論せざる所にして、直ちに仏祖の門庭に造り、小乘大乘は、皆之を為すを屑しとせず、乃ち教外別伝、能所を没し、踪跡を絶し、言語想相の外に超ゆる者なり。至れるかな玄機、妙なるかな秘義。今の學者の、個の道理有り、個の学有るの人は、人と理と二と為れば、則ち兩辺の見到に墮す。又一等の世事を以て別に世事と作し、學問を以て別に學問と作し、世事を幹す時は、黽勉として従事し、學問を忘れ、工夫を幹す時は、理趣に沈潜し、事為に違悞するもの有り。古の人、世事に勤めし者は、禹に如くはなし。禹は必ず水土の平かなるを待ち、然る後學ぶと謂えば、則ち八年外に在るは、みな苦趣なり。事變に當る者は、周公に如くは莫し。公は必ず流言の止む

を待ち、然る後学ぶと謂えば、則ち三年東に居るは、皆憂危なり。心と跡の判ること久し。学問に久しき者と雖も、未だ心跡を混融して一と為し、縦横無礙なる能わず。その弊、安くに在りや。

「現代語訳」

上乘とは、性命のからくりを見破つて、生命あるものであると生命なきものであると、あれこれ区別を設けたりせず、直ちに仏祖の境地に到達し、小乗・大乘「の段階的な修行」を実践することを潔しとせず、かえつて言葉によらない真理を自得し、主観・客観の対立を撥無し、外面的な物事の姿を超越して、言葉や思いをはるかに超越した者のことである。すばらしいことだ、この奥深いはたらきは。神妙なことだ、この秘められた意義は。今の学問をする者で、かくかくの道理を身につけ、かくかくの学を身につけたという人は、人と理とが二つに分かれているのだから、物事を二つに分けてとらえる相対的な見方に墮してしまっている。また、ある種の人々は、世俗の仕事は世俗の仕事、学問は学問、というように、両者を別のこととしてしまい、世俗の仕事をする時は、勤勉にそれに従事して、学問のことは忘れ、修養をする時には、理に沈潜して、仕事は失敗してしまふ。昔の人で、世俗の仕事に勤めた者としては、禹に及ぶ者はいない。その禹は、水土が安定するのを待つて、その後で学問をしたのかと考えるみると、八年間彼が外にいた間、全て苦労の中にあつたではないか。「また」事変に対応した者としては、周公に及ぶ者はいない。その周公は、流言飛語がおさまるのを待つて、その後で学問をしたのかと考えると、三年間、彼が東方にいたのは、全て憂いや心配の中であつたではないか。心「のあり方」と、外的な行動とが、二つに分かれてしまつてから、久しいことである。長い間学問をした者でも、心と行動とを溶け合わせて一つにし、縦横自在であることはできないでいる。その弊害「の原因」は、一体どこにあるのだろうか。

「注」

有情無情〓有情は生命あるものこと。生物。無情は生命がないものこと。無生物。 教外別伝〓『五燈会元』

卷一に「世尊、靈山會上に在りて、拈華して衆に示す。是の時、衆皆默然たり。唯だ迦葉尊者のみ破顔微笑す。世尊曰く、『吾れに正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙の法門有り。不立文字、教外別伝、摩訶迦葉に付囑す』」(22・二・44)とある。禅宗の宗旨は、教義としてではなく、(直接にその精神を指し示すという)別の方法によって伝えられるものという主旨。 能所〓主観と客観のこと。 禹必〓『孟子』滕文公上篇に「是の時に当たりてや、禹、外に八年、三たび其の門を過ぐるも入らず」とある。 周公〓『書経』金縢篇に「武王既に喪く、管叔及び其の羣弟、乃ち國に流言して曰く、『公、將に孺子に利あらざらんとす』」と。(略)周公、東に居ること二年、則ち罪人斯に得たり」とある(周公の「居東」の期間等については諸説がある)。(檜崎洋一郎)

【四四】

「原文」

人在衆生之中、智巧固優、苟不知学、比衆人猶苦。何貴於智。学者在衆人之中、知学固優、苟不了道、比衆人猶苦、何貴於学。天機在人、分分明明、停停当当、活潑、円融、透徹、当動時自動、当止時自止、加不得一毫人力安排布置。凡人動靜語黙、幹好幹不好。是他其所以生天、生地、生人、生物、春夏秋冬、風雲雷雨、飛潜動植、皆是他在变化。百姓日用、用此也。率性、率此也。此是後天道、若墮其中、即有生滅、難免輪迴。縱雖曉得向上事、難以透入。

「書き下し文」

人、衆生いまたのの中に在りては、智巧固より優れしに、苟くも学を知らざれば、衆人より猶お苦しむ。何ぞ智を貴はんや。学者衆人の中に在りて、学を知ること固より優れしに、苟くも道を了せざれば、衆人より猶お苦しむ。何ぞ学を貴はんや。

天機は人に在りて、分分明明、停停当當にして、活潑にして円融透徹、當に動くべき時に自から動き、當に止むべき時に自から止む。一毫も人力の安排布置するを加え得ず。凡そ人の動靜語黙、好きを幹なし好からざるを幹なすは、是れ他かれその天生じ、地生じ、人生じ物生ずる所以にして、春夏秋冬、風雲雷雨、飛ぶもの潜むもの動植(物)、皆是れの変化するに在るなり。「百姓日に用うる」は、此を用うるなり。「性に率つ」は、これに率うなり。此れは是れ後天の道なり、若しその中に墮すれば、即ち生滅ありて、輪廻を免れ難し。縦い向上の事を暁り得ると雖も、以て透入し難し。

「現代語訳」

人はもろもろの衆生のなかでは、もともと智謀と巧詐が優れており、かりにも学問をしなければ、衆生より「智謀と巧詐のため」苦しむことになる。どうして知を尊ぶのか。学者は衆人の中では、学問が分かる点では優れている。かりにも道を悟らなければ、衆人より「学問的に」苦しむことになる。どうして学問を尊ぶのか。「天賦の悟性という」天機は、人にあつてははつきり分明であり、うまくとりさばかれて、活発自在に融通し透徹して、動くべき時はおのずと動き、停止すべき時はおのずと停止する。少しも人為的な案配など加えようがない。なべて人が動いたり安静していること、話したり黙していることや好いことはなし好からぬことはしないのは、それこそ天地がこの世に生じ、人が生まれ物ができる根拠であり、春夏秋冬、風が吹き雲が湧き雷が鳴り雨が降る、飛んだり潜んだりする動物植物も、皆それらに変化するなかにある。「易に云つ」「百姓日に用うる」は、此を用いているだけである。「孟子に云つ」「性に率つ」とは、此に率っているのである。これが後天の道となつては、もしその中で墮落すれば、即ち生滅がおこり、輪廻を免れることは難しく、縦たどい向上さしりの境地に気がついたとしても、これを悟りきり突き抜けるのは難しいことである。

「注」

智巧＝智謀と巧詐。『韓非子』揚権篇「聖人之道、去智与巧、智巧不去、難以為常」と見える。 学者在衆人之中

「この「衆人」は「衆生」の誤りか。天機＝天与の枢機。天賦の悟性。『莊子』大宗師篇に「其嗜欲深者、其天機淺」とある。また造化の奥秘。陸游『劍南詩稿』卷十九「醉中草書因戲作此詩」「稚子問翁新悟處 欲言直恐泄天機」とある。「南詢録自叙」に「四十二歳 遇人之指点、於事變中探討天機 所謂天機」とあり、「一」には「識透天機自運、不假造化」と既出。 停当＝うまくとりさばく。『朱子語類』卷一九論語「如夫子言文質彬彬、自然停当恰好」とある。 活発＝生動自然のさま。自在のさま。『景德伝燈録』卷四無住禪師「真心者念生亦不順生、念滅也不依寂 無為無相、活發發平常自在」。(T51・0234b) 円融＝偏執を取り除き、円満に融通すること。『楞嚴經』卷四に「地・水・火・風、本性円融、周遍法界、湛然常住」(T39・0874a)とある。 幹好幹不好は他＝六八条に「幹好的也是心幹不好的是心」とも云う。 百姓日用＝『易經』繫辭上伝に見える。「南詢録自叙」などに既出。 率生＝『中庸』第一章。「天の命を之れ、性と謂い、性に率うを之れ道と謂い、道を修むるを之れ教と謂う」。 向上事＝一段上へ突き抜けた消息(『禅語』二二八頁)。*以下参考。「向上」は中国唐・宋代の俗語で、「以上」の義、あるいはそこから発展して最上・無上の義と解される。例えば、仏向上 は仏を超えた更に上のあり方のこと、向上一路 は究極・絶対の境地のこと。 向上一句 は悟りの立場から発する言葉である。これらの 向上 を悟りに向かって進むことと解するのは誤りである。(『岩波仏教』二五一頁)「向上」という語は一六・三五・四四・五三・七〇・七五・八六・一〇九条に見える。

(藤井良雄)

【四五】

「原文」

但動念即属境界、有善有惡。与無善無惡面目、另是一様。凡聖消息、於是分矣。超出動靜語默者、無善無惡妙機也。纔

有著、不拘好歹、俱落境界、而非本来面目。不露面目時、是個甚麼模樣。説似一物即不中。有著的是有心知識、不著的
是無心知識。

「書き下し文」

但し念を動かさば、即ち境界に屬し、善有り悪有り、無善無惡の面目と、另に是れ一樣なり。凡聖の消息は、是に於
いて分かる。動靜語黙を超出するは、無善無惡の妙機なり。纔に著すること有れば、好歹に拘わらず、俱に境界に落
ちて、本来の面目に非ず。面目を露わさざる時、是れ個の甚麼の模様ぞ。「説似一物即不中」(一物を説似かば即ち中た
らず)。著すること有るは是れ有心の知識、著せざるは是れ無心の知識なり。

「現代語訳」

念慮を動かさば、対境に引きずられて、善が生じ悪が生じ、無善無惡の「本来の」すがたとは全く違っている。凡人と
聖人との実態は、これが分かれ目である。動靜・語黙「の相對」から超出するのは、無善無惡のすぐれたはたらきであ
る。少しでも執着すれば、「結果の」良し悪しには関係なく、いずれも対境に引きずられて、本来の面貌ではない。「本
来の」面貌を現出しないときは、それはいかなるものであるのか。「南嶽懷讓は」「ああとが、こうとか」「一言でも説
いたなら、もう当たらない」と言った。執着するのは、ことさらな認識であり、執着しないのは自然な認識である。

「注」

境界＝対象、外界に同じ。 無善無惡＝『伝習録』卷下一一五条に、「無善無惡は是れ心の体、有善有惡は是れ意
の動」とある。すなわち意念上に善や悪が生じてくる。 另は一樣＝「別は一樣光景了(別に一つのありさまになる

と、うって変わったようすになること)」。『中国語』上二九四五頁)とある。 消息＝動靜、状況、実態。(『禅語』

二二六頁) 好歹＝良し悪し。 本来面目＝本来の自己。主人公。『六祖壇經』(T48・349b)に「惠能云う、善を

思はず悪を思わず、正に与麼の時、那箇が是れ明上座の本来面目。(惠能云、不思議、不思議。正与麼時、那箇是明上座本来面目)(行由品第一)とある。「本地風光(本来の落ち着きどころの風景)」に同じ。(『禅語』四三一頁) 是個甚麼模様＝三浦國雄『朱子語類抄』(講談社学術文庫)に、『畢竟仁是甚麼様』の『甚麼様』は、『甚麼模様』とも書く。(中略)この場合は、どのようなものかの意。『模様』は、すがた、かたち、様子(四〇六頁)とある。説似一物即不中＝我が心中に会得していることを言葉で説明すれば、はや固定的一物と化して、眞実よりはずれること。六祖慧能と南嶽懷讓の對話において懷讓が発した言葉(景德伝燈録 卷五・T51・240c)、『臨濟録』「示衆」にも「古人云」として引用されている。「説似」の「似」は与格の前置詞(入矢訳『臨濟録』一四六頁)。(牛尾弘孝)

【四六】

「原文」

如今眼前這些人、一往一來動作的、都是本色、不曾加添一毫意思安排。我們參究到這等去處、纔得妥帖。久久心法双泯、就与赤子一般、渾無掛礙。到此地位、日新又新。火然泉達之機、自有不可遏。到頭消息、豈易言哉。

「書き下し文」

如今眼前の這些の人の、一往一來動作するもの、都て是れ本色にして、曾て一毫の意思安排を加添せず。我們、這等の去處に參究し到れば、纔かに妥帖なるを得。久久にして心と法と双び泯べば、就ち赤子と一般く、渾べて掛礙無し。此の地位に到れば、日に新に又た新にして、火の然え泉達するの機、自より遏むべからざる有り。到頭の消息は、豈に言い易からんや。

「現代語訳」

今、目前のこれらの「人々で」行ったり来たり動いているものは、皆素みなのままであつて、これまで少しの意図や手心を加えていない。我々は、このような場所にまで、研究し突きつめてこそ、穏やかさを得られる。「この状態を」長い間続けていると、心も事物も両方とも消え去つてしまい、まるで赤ん坊と同じように、全てにおいて「全く」障害はなくなる。この境地にまで到達すれば、「『大学』に言うように」「日々に「自分を」新しくし、「『孟子』に言うように」「火が燃え泉が流れる」仕組みは、自然に止めることができない「ように何事にも融通無碍になる」。行き着く所の「最上の」内容については、どうして言うことが簡単であるか、「とても難しいのである」。

〔注〕

本色＝ほんじき。粉飾を絶つて生地丸出しの、地金そのものの、という意。(『禅語』四三〇頁)『碧巖録』第五則本則に「這裏に到らば、須是らく箇の真実の漢にして、聊か拳著するを聞くや、徹骨徹髓まで見得透してこそ、且に情思意想に落ちざるべし。若是し箇の本色行脚の袖子なれば、他の恁麼なるは、已是に郎当に人に為えしものなるを見ん。(到這裏、須是箇真実漢、聊聞拳著、徹骨徹髓見得透、且不落情思意想。若是箇本色行脚袖子、見他恁麼、已是郎当爲人了也)」「(T'ib.·155b)とある(岩波文庫『碧巖録』上九九頁)。去処＝単に「ところ」の意の俗語(『禅語』八八頁)。また、「行くべきところ」の意(『大漢』二卷六七一頁)。妥帖＝穩当、合適、安定、平靜、寧靜の意(『漢語』第四冊三〇九頁)。法＝ここでは事物の意(『岩波仏教』七八頁)。掛礙＝阻害、邪魔をすること。(『漢語』第六冊五四七頁) 赤子＝『孟子』離婁下の「大人とは、其の赤子の心を失わざる者なり。(大人者、不失其赤子之心者也)」を踏まえていると考えられる。日新又新＝『大学章句』伝第二章に「湯の盤銘に曰く、苟に日に新にせば、日日に新に、又た日に新なり」と。(湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新)とある。火然泉達＝『孟子』公孫丑上篇に「凡そ我に四端有る者、皆拈めて之を充にすることを知らば、火の始めて然え、泉の始めて達するが若し。(凡

有四端於我者、知皆擴而充之矣。若火之始然、泉之始達」とある。 到頭ニ終わり、決着、けりがつくこと。また、つまるどころ、畢竟の意（『禪語』三三九頁）。この他、「最上の、最大の」の意もある（『大漢』二卷二五〇頁）。
消息ニ動靜、狀況、実態、の意（『禪語』二二六頁）。また、移り変わり、有様、内容、様子の意（『大漢』六卷一一八六頁）。
（安部力）

【四七】

「原文」

当機弘逆時、不容不怒。当感傷時、不容不哀。文王之赫怒、孔子哭之慟、皆発而中節、天機不容自己也。学者、不達孔文這一竅、当怒而怒、謂之動客氣、強執而不怒、謂之有涵養。与文之帝則、孔之從心、大不頼矣。

「書き下し文」

機の弘逆する時に当りては、怒らざるべからず。感傷する時に当りては、哀しまざるべからず。文王之赫怒、孔子の哭して慟する、皆な発して節に中るは、天機の自ら已むべからざればなり。学ぶ者、孔・文の這の一竅に達せず、当に怒るべくして怒る、之を客氣を動かすと謂い、強執して怒らざる、之を涵養有りと謂う。文の帝則、孔の從心とは、大いに頼しからず。

「現代語訳」

心の機はたらきが思い通りにならない時には、怒らないではいられない。ものに感じて心が傷む時には、哀しまないわけにはいかない。文王はかっと怒り、孔子は声をあげて泣きひどく悲しんだが、どちらも「感情を」露わにしなから節度を保っていたのは、自然のままの心のはたらきがやむを得ず「そつ」させたからである。「世間の」学ぶ者が、孔子や文王の

この一^ツ竅をさとることなく、当然怒るべくして怒ったのを、血気に駆られた(行為だ)と言ひ、無理に我慢して怒らないのを、修養が行き届いているなどと言つ。(これは)人民を無意識に帝^{きまり}則に従わせた文王や心のままに従つて規矩を踏みはずことがなかつた孔子とは、全く異なる。

「注」

文王之赫怒。『詩経』大雅皇矣篇に「王赫斯として怒り、爰に其の旅を整う。(王赫斯怒、爰整其旅)」とある。

孔子哭之慟。『論語』先進篇に「顔淵死す。子、哭して慟せり。(顔淵死、子哭之慟)」とある。 皆発而中節。『中庸』第一章に「発して皆な節に中る、之を和と謂う。(発而皆中節、謂之和)」とある。 一竅。四〇条に既出。

文之帝則。『詩経』大雅皇矣篇に「識らず知らず、帝の則に順う。(帝謂文王、予懷明德、不大声以色、不長夏以革、識不知、順帝之則)」とある。

而從心所欲、不踰矩)とある。 孔之從心。『論語』為政篇に「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず。(七十

而從心所欲、不踰矩)」とある。 (鶴成久章)

【四八】

「原文」

夜間夢幻是游魂、把識神到处引將去了。曾所未見境界象見之、曾所未到处到之。与日間情念同一、妄機之展転也。均謂之幻。幻也者、從無中而生、從無中而滅、本非真実、何足繫念。一切情念依機而起、機依神、神返真心妙明、無端変態生、生不已、透妙明真心寂滅現前、一切生滅自然潜消默化。雖自己亦不得而与、其機之神也。

「書き下し文」

夜間に幻を夢みるは、是れ游魂、識神をば到处に引き將ち去り了るなり。曾て未だ見ざる所の境界之を見、曾て未だ

到らざる所の処之に到る。日間の情念と同一にして妄機の展転なり。均しく之を幻と謂つ。幻なる者は無中従り生じ、無中従り滅し、本より真実に非らず。何ぞ繫念するに足らん。一切の情念は機に依りて起き、機は神に依り、神は真心の妙明に依り、端無く変態し生生として已まず。妙明真心に透れば寂滅現前し、一切の生滅は自然に潜消黙化す。自己と雖も亦た得て与らず。其れ機の神なればなり。

「現代語訳」

夜に幻を夢見るのは、さまよう魂魄「亡霊」が、精神をほうぼうにひきまわしたものである。「そのため」かつて見たこともない世界を見たり、行ったこともない場所に行くのである。昼間の情念と同じで妄動する心の働きの迷走である。「だから幻と情念を」ともに幻と言つのである。幻は無から生滅し、もとより真の実在ではなく、案することもない。「しかし」すべての情念は心の働きによって起こり、心の働きは神によって起こり、神は真心の靈妙澄明によりかかり、絶えず変化して活発で止むことがない。「ただ」靈妙澄明な真心に到達すると寂滅（悟りの境地）がたちどころに現れ、すべての生滅はおのずと沈静してしまふ。「そうすると」自分自身であっても、関与できないのである。「つまり」心の働き（機）が神妙不可思議だからである。

「注」

游魂＝宙をさまよう魂魄。『易経』繫辞上伝に「仰以觀於天文、俯以察於地理、是故知幽明之故。原始反終、故知死生之說。精氣為物、遊魂為變、是故知鬼神之情狀」とある。 識神＝精神。 境象＝心の対象世界。 客觀界。

到処＝いたるところ。ほうぼう（中田『三六五頁』）。 機＝心の働き（『禅学』一九一頁）。 神＝（氣の）神妙不可思議なはたらき。『易経』繫辞上伝に「陰陽不測、これを神と謂つ」とある。 妙明真心＝靈妙澄明な真心。『楞嚴

經』卷二（T16・110）に「一たび迷つて心と為せば、決定して惑いて色身の内と為す。色身より外、山河虚空大地に

泊ぶまで、咸く是れ妙明の真心中の物なるを知らず。(一迷為心。決定惑為色身之内。不知色身外泊山河虚空大地。咸是妙明真心中物)とある。荒木訳『楞嚴経』(一〇一頁)参照。(荒木龍太郎)

【四九】

「原文」

学問不的当人、毎談世事、却有滋味、有情趣。一句延一句、一事延一事、不覺漂流去了。学問的当人、非不談世事。其心淡然、無欲無情、一句兩句三四五句、就沒有説的相。這等人做不得主、以致葛藤不断。有等做工夫的与不曾忘見的、於世事亦少談論、有物在心、学問亦未的当。於世事無情、於道理有情、均不是忘機之流也。

「書き下し文」

学問すること的当ならざる人は、毎に世事を談ずるも、却つて滋味有り、情趣有り。一句ごとに一句を延ぎ、一事ごとに一事を延ぎ、漂流し去り了るを覺らず。学問すること的当なる人も、世事を談ぜざるには非ざるも、其の心淡然として、欲無く情無く、一句兩句三四五句、就ち説きて不相なる没有し。這等の人は主と做り得ず、以て葛藤断ぜざるに致す。有等の工夫を做す的と曾て見を忘れざる的も、世事に於いて亦た談論少なきも、物の心に在る有りて、学問も亦た未だ的当ならず。世事に於いて情無きも、道理に於いて情有れば、均しく是れ忘機の流ならざるなり。

「現代語訳」

学問を的確にしていない人は、いつも俗世間のことについて語っているが、「その話の内容には」味わいがあり、情趣がある。「ただ、語られている」言葉や事柄が、「だからだと」言葉や事柄を招き「続け」、「そんな状況の中を」漂流してしまっていることに気付かない。学問を的確にしている人も、俗世間のことについて語らないことはないが、彼らの

心は「俗世の事に対して」淡泊であり、欲も情もなく、一句、二句、三・四・五句と「言葉を続けても」、変なことはしゃべらない。「だが」これらの人は主「人公」となりえていないから、文字言語に煩わされ続けることになる。工夫（修行）をして人々や、「妄」見を忘れることができている人にも、世間のことについて余り語らない輩がいるが、心に「俗世に対する」物（執着）があるのであり、学問的的確とはいえない。世間のことについて情（とらわれ）がないにしても、道理について情（とらわれ）があるのであれば、すべて忘機（無心）の仲間ではないのである。

「注」

的当（的確）、確實、恰当、穩妥（『縮印漢語』四八三三頁）。世事（世のこと）。世の中のこと。仏道修行などと

かわりのない世間のことども、世故（『禅字』六五八頁）。沒有説的（不）相（的）は「底」「地」と同じ助字。辞

書類に「…的（不）相」という言葉は見えないが、『近代漢語大詞典』の「不（不）像」項に、「不（不）常、異様」の意とあり、『紅樓夢』の「…跑的（不）像」を用例として引いている（一五三頁）。「相」と「像」は普通であると考えられる。葛藤（葛藤）

葛や藤のつるが錯綜するように、文字言語の煩わしさをいった語。文字にこだわって、語句に束縛されることに喩える。理屈をこねまわすこと。教への煩わしいことをしりぞけていう語（『中村』一八一頁）。有等（有等）『禅語』の「有等」

条（二九頁）参照。一部（の）。…有的、有些（『中国語』三七七頁）。忘機（忘機）亡機とも書く。機は

物を求める分別心。分別の心を忘れて無心無作であること。大悟徹底の人のこと（『中村』一二四六頁）。『宛陵録』巻一に、「問う、『聖人の無心（すなわ）は即是（すなわ）ち仏なり。凡夫の無心は空寂に沈む莫（も）きや』と。師云う、『法に凡聖無く、亦た沈寂も無し。法本より有（も）ならざるも、無見と作す莫（も）し。法本より無ならず。有見と作す莫（も）し。之を有すと無と尽く是れ情見

なり。猶お幻翳（も）の如し。所以に云う、『見聞は幻翳の如し』と。知覚は乃ち衆生なり。祖師門中は只だ機を息み見を忘るるを論ずるのみ。所以に忘機は則ち仏道隆（たか）んにして、分別は則ち魔軍熾（さか）なり』と。（問聖人無心即是仏。凡夫無心

莫沈空寂否。師云。法無凡聖亦無沈寂。法本不有。莫作無見。法本不無。莫作有見。有之与無尽是情見。猶如幻翳。所以云。見聞如幻翳。知覺乃衆生。祖師門中只論息機忘見。所以忘機則仏道降。分別則魔軍熾」とある。

(野口善敬・森宏之)

【五〇】

「原文」

見道之人、遊戯三昧、一切情念不能繫。苟非其人、拳心動念、皆是無明、障礙本性。見道之人悔過也、好收斂精神、保合太和元氣。不悔也、好放蕩形骸之外、心曠神怡。苟非其人、悔則墮外道、不悔則墮世情。

「書き下さし文」

見道の人は、遊戯三昧して、一切の情念、繫ぐこと能わず。苟くも其の人に非ずんば、拳心動念すれば、皆是れ無明ほんのうにして、本性を障礙す。見道の人は、過ちを悔ゆるも、好く精神を收斂し、太和の元気を保合す。悔いざるも、好く形骸の外に放蕩し、心曠く神怡らぐ。苟くも其の人に非ざれば、悔ゆれば則ち外道に墮し、悔いざれば則ち世情に墮す。

「現代語訳」

道を悟った人は、とらわれない境地で自由自在に振る舞い、一切の情念に束縛されることがない。「しかし」もし、こつした境地を味わうのに相応しい人物でなければ、意念のはたらきが生ずると、全てが無明となり、本性「のありかた」をさまたげてしまふ。道を悟った人は、過ちを悔いると、精神を收斂させ、「陰陽の二氣の」大いなる調和であるところの「宇宙の」おおもとの気を「自分の中で」保持し融合させることができる。悔いなかったとしても、形骸「としての身体」の外に「自由に」さまよい、心を広々とさせ精神を和らげることができる。「しかし」もし、それに相応

しい人物でなければ、悔いると外道（の間違つた考え方）に墮し、悔いないままであれば俗世間の情念に墮してしまふことになるのだ。

「注」

遊戯三昧＝仏の境地に徹して何ものにもとらわれないこと。自由自在でのんびりとくまななこと。（『中村』一三七九頁） 拳心動念＝『伝心法要』（148・380a）に「拳心動念すれば、即ち法体に乖き、即ち著相と為す」とある。

保合太和＝『易経』乾卦象伝にみえる。

（檜崎洋一郎）

【五一】

「原文」

学者以同流合汚為混俗、以肆情徇物為率真。与其同也、不如立己於峻。与其党也、不如踽踽涼涼、和而不同、群而不党、非学問明白、脚跟穩当者不能也。終日乾乾、夕惕若、無咎。学者、不可容易撒手。

「書き下し文」

学者、流れに同じ汚れに合するを以て俗に混ずと為し、情を肆まいままにし物に徇うを以て真に率うと為す。其の同ぜんよりは、己を峻きに立つるに如かず。其の党せんよりは、踽踽涼涼たるに如かず。和して同ぜず、群して党せざるは、学問明白にして、脚跟穩当なる者にあらざれば能わざるなり。終日乾乾として夕に惕若として咎なし。学者、容易に手を撒すべからず。

「現代語訳」

現今の学問をする者は、『孟子』に云う「流れに沿い汚れに合流することを俗と交わるとし、気まま恣にして他人と同

じようにするのを真率とする。他人に同ずるより、自分を峻厳に立てる方がよいし、党派を組むよりは一人で孤独なのがよい。『論語』に云つ、「和して同ぜず」「群して党せず」は、学問がハッキリ分かつており、足元しつかりと立っている者でなければできないのである。一日中怠らず努力し、『易』に云つ「夕べには反省して、咎めようもない。学問をする者は、そう簡単に手を引くことはできない。

【注】

同流合汚『孟子』尽心下篇に「流俗に同じ汚世に合す」とある。 踽踽涼涼『一人で孤独のさま。』孟子』尽心下篇に「古之人、行何為踽踽涼涼。」とある。 和而不同『論語』子路篇に「君子は和して同ぜず、小人は同じて和ぜず」とある。 群而不党『論語』衛靈公篇に見える。 終日乾乾夕禱若無咎『易経』乾卦九三に「君子終日乾乾、夕惕若、厲無咎」とある。 撒手『サツシユ。何かにつかまっていた手をパツとはなすこと。』碧巖録』四一則に「直だ須らく懸崖より手を撒(ハナ)して、自ら肯って承当(ワガゴト)とすべし。絶後に再び甦るれば、君を欺ることを得ず」とある。(藤井良雄)

【五二】

【原文】

書生泥於旧見、謂仏自私自利、不如他聖人万物一体。仏者妙覺也、乃大智之別名。世界在大覺理中、大海之一浮漚也。皆幻化。自仏視之時、藐然其至微也。故其立教、以出世為宗。儒者在一浮漚中、尚且鑽研不出、敢望其領是道乎。苟非超群逸格之才、不足以担当此道。古今罕有其人。豈可責備書生輩。書生且不可、況全真之徒歟、況時流之禪歟。

【書き下し文】

書生、旧見に泥み、「仏は自私自利にして、他の聖人の万物一体なるに如かず」と謂えり。仏とは妙覺なり、乃ち大智の別名なり。世界は大覺理中に在りて、大海の一浮漚うきなり。皆な幻化なり。仏自より之を視る時は、藐然ぼくとして其れ至微なり。故に其の教えを立つるに、出世を以て宗と為す。儒者は一浮漚中に在りて、尚お且つ鑽研し出さざるに、敢えて其の是の道を領きとるを望まんや。苟も超群逸格の才に非ざれば、以て此の道を担当するに足らず。古今、其の人有ること罕まれなり。豈に備そとわらんことを書生輩ともに責む可けんや。書生すら且つ不可なり、況や全眞の徒をや、況や時流の禪をや。

「現代語訳」

儒教を学ぶ人は、古い考えにとらわれて、「仏は自己本位であつて、あの聖人が〔天地〕万物を一体とみなすのには及ばない」と言っている。仏は、無上の悟り〔を得た人〕であり、広大な智慧〔を得た人〕でもある。世界は偉大なる悟りの理法の中にあつて、大海の一つの泡〔のよつな物〕である。まったく実体がない。仏からみれば、とるに足らぬほど小さなものである。だから教えを立てるのに俗世間から離れることを根本とした。儒者は一つの泡〔のよつな物〕の世界〕の中で、なにも究め尽くすことさえできないのに、この道を悟ることを期待できるだろうか。とびぬけてすぐれた英才でなければ、この道になつことはできない。古今を通じて〔それができる〕人は、めったにいない。どうして完全にできることを学問をする人たちに求めることができようか。彼等にできないのに、まして全眞教のともがらや、時流の禪者にできるわけがない。

「注」

自私自利 〃 『朱子語類』卷二二六「釈氏」一五条に、「仏氏の失は、自私の厭えん（いやがる）に出で、老氏の失は、自私の巧たくみ（たくみ）に出づ。世故を厭薄して、尽く一切を空くうにし了おわらんと欲するは、仏氏の失なり」とある。『伝習録』卷中・又〔荅陸原静書〕八に、「但だ仏氏は箇の自私自利の心有り、所以ゆゑに便ち同じからざること有るのみ。〔ここで儒

と仏の違いがでてくる」とある。また「儒家が仏家を難するときの常套の一つ。前にも述べたような、公なる天理に生きるのではなく、むしろ自己の一心に万法を見よつとする、そのいわば自己一元の悟りの在り方を、儒家の側からこ

ういう」(中央公論社・世界の名著・続4『朱子王陽明』四五七頁)とある。聖人万物一体」「仁者は、天地万物を以て一体と為し、己に非ざる莫きなり」(『二程全書』卷二・三丁)とある。妙覺「仏の不可思議絶妙なる無上の悟り。」(中村『一三〇二頁) 大智「広大なる智慧、仏智のこと。(同上九二四頁) 大覺「偉大なる悟り。(同

上九一四頁) 大海之「浮漚」『楞嚴經』妙明真心の説明の箇所、「譬えば澄清たる百千の大海は、之を棄てて、

惟だ「浮漚の体を認めて、目けて全潮と為し、瀛渤を窮尽せりとするが如し(譬如澄清百千大海、棄之唯認一浮漚體目

為全潮、窮尽瀛渤)」(T19・1103~1104)とある。荒木訳『楞嚴經』卷二に、「それはたとえば、澄みきつたはてしない

大海は無視して、一つの泡そのものに注目して、それを海潮の全量だとみなし、大海をきわめ尽くしたとするようなものである」と訳されている。藐然「遠くはなれたさま。責備」「論語」子路篇に、「其の人を使うに及びては、

備わらんことを求む」とあり、微子篇に、「備わらんことを一人に求むること無かれ」とある。全真「道教の全真

教一派をさす。(牛尾弘孝)

【五三】

「原文」

講聖学的、脱不得秀才旧套子。雖説情順万事而無情、終是有沾帶。饒他極聰明、会修為止、透現前的向上事、実難悟入。

「書き下し文」

聖学を講ずる、秀才の旧套子を脱し得ず。「情は万事に順いて情無し」と説くと雖も、終には是れ沾帶すること有り。

饒たごい他極めて聡明なるも、会よく修むれば止と為し、現前の向上の事に透ることは、実に悟入し難し。

「現代語訳」

聖人の学問を探究する人々は、型にはまった秀才から抜け出ることが出来ない。「程明道が」「情は万事に順いながら、そこに私」情はない」と説いてはいるが、結局のところ、万事に心が附着している。「六祖慧能が悟る契機となった『金剛経』にある「心无所住而生其心」の境地には及びもつかないのだ。」たとえ、彼（ら聖人の学問を探究する人々）が大変聡明であつても、「慧能と張り合つた神秀と同様、鏡を磨き続けるといつた漸」修がきちんとできれば（それで）お終いであり、「本来の最終目標である」目前の向上さとりの事に透過するといふ点においては、実際の所、悟入さとることは困難である。

「注」

旧套子＝古い形式。ありきたりのやり方。一六条を参照。 情順万事而無情＝『二程全書』卷四一「定性書」に見える。「夫れ天地の常なるは、其の心、万物に普くして心無きを以てなり。聖人の常なるは、其の情、万事に順いて情無きを以てなり。故に君子の学は、廓然として大公、物来りて順応するに若くは莫し。（夫天地之常、以其心普万物而無心。聖人之常、以其情順万事而無情。故君子之学莫若廓然而大公、物来而順応）」とある。 沾帯＝附着の意。四二条既出。『伝習録』巻下に「須胸中渣滓渾化、不使有毫髮沾帯始得」とある。また、心が引かれる、気がかりがある、の意もある（『漢語』第五冊一〇六七頁）。 為止＝(wǎi zhǐ) やめにする、終わりにする（『中国語』三一九七頁）。また、ここの「止」が『大学章句』経文「大学之道、在明明徳、在親民、在止於至善」を踏まえている可能性もあるが、この文章全体が『六祖壇経』を踏まえていると考えて訳出した。本条の慧能や神秀については中川孝『禅の語録4 六祖壇経』（筑摩書房）「五 神秀の呈偈」（二二六頁）、「八 受法」（四〇頁）を参照。 向上事＝四四四条注参照。

(安部力)

【五四】

「原文」

情順万事而無情、即物来順應義。不如在廓然大公上理会。在廓然大公上理会、更不如内外両忘。

「書き下し文」

「情万事に順いて情無き」は、即ち「物来りて順應す」の義なり。「廓然大公」の上に在りて理会するに如かず。「廓然大公」の上に在りて理会するは、更に「内外両つながら忘るる」に如かず。

「現代語訳」

「〔聖人は、その〕情こころがあらゆる事物に順い（作為的な）情が無い」とは、すなわち「外物が現れればそれに自然と順應する」という意味である。「〔心が〕廓然からりとして何の分け隔てもない」「〔天地と聖人の心持ち〕をつかみ取るのが一番である。」「〔心が〕廓然として何の分け隔てもない」「〔天地と聖人の心持ち〕をつかみ取るなら、きっと「内（自己）と外（自己以外の事物）」との区別をすっかり捨て去る」のが一番である。

「注」

情順万事・物来順應・廓然大公二前条参照。

内外両忘二「定性書」に、「其の外を非として内を是とするより、

内外を之れ兩つながら忘るるに若かざるなり。兩つながら忘るれば則ち澄然として事無し。（与其非外而是内、不若内外之両忘也。両忘則澄然無事矣）」とある。

（鶴成久章）

【五五】

「原文」

事上窮究理、理則難明、理上窮究事、事則易明。事理双泯、窮究個甚麼、此處難得明白。事理双泯、就是向上事。常心常靜、常靜常心、還是動靜中事。機動念動、機止念止。有念有情、非解脫之門。盈虛消息之機、未有頃刻之停止、難以言非定非涅槃耳、非涅槃非安樂、非安樂非究竟。

「書き下し文」

事上に理を窮究せば、理は則ち明らめ難く、理上に事を窮究せば、事は則ち明らめ易し。事と理と、双び泯なまければ個の甚麼なまをか窮究せん。此の處、明白なるを得難し。事と理、双び泯なまきるは、就ち是れ向上の事なり。常に應じて常に靜かに、常に靜かにして常に應ずるも、還つて是れ動靜の中の事なり。機動けば念も動き、機止まれば念も止まる。念有り情有るは、解脫の門に非らず。盈虛消息の機は、未だ頃刻の停止有らず。以て定に非らず涅槃に非らずと言ひ難きのみ。涅槃に非らざれば安樂に非らず、安樂に非らざれば究竟くまうに非ず。

「現代語訳」

事物（との対応）の中で、真理を究めようとすると、真理は明らかにしにくい。真理の方面から事物を究めようとすると、事物は明らかにしやすい。事物と真理と、双方とも尽きてしまうと、何を究めることがあるだろうか。「ただ」この所は、明らかにしにくい。事物と真理が双方とも尽きることが、とりもなおさず究極のことだからだ。常に反応して静止し、静止して反応しているのは、動靜（の範囲内）のことである。機（心の兆し）が動けば（心の）思念も連動し、停止すれば思念も停止する。念があり、情有るものは、悟りとはいえない。生滅がある機というものは、まだ少しの停止もない。「だから」定でもなく涅槃でもないと、言にくいのである。涅槃でなければ安樂ではなく、安樂でなければ

ば究境の心境ではないのである。

〔注〕

事理 = 事 は個別的具体的な事象・現象を意味し、理 は普遍的な絶対・平等の真理・理法を指す。中国仏教独特のものである。現象としての 事 と本体としての 理 との関係については、『大乘起信論』では、個別的事象はいずれも真如から現象したものであるから、事と理とは相即して無別であるとする。華嚴宗では、事と理とは融通無礙の関係であると説き、四法界(事法界・理法界・理事無礙法界・事事無礙法界)や三重觀門(真空觀・理事無礙觀・事事無礙觀)などの教理を形成し、普遍的な理と個別的な事とが一体不可分であることを強調し、事理 もしくは 理事 の語は中国華嚴宗の教理を代表する言葉の一つとなつた(『岩波仏教』四五五頁参照)。

盈虚消息 = 満ち欠け、消えることと生じること。『易経』豊卦象伝に「天地盈虚、与时消息」とある。頃刻 = 少しの間。向上 = 究極の悟りの境地。既出四四条注参照。定 = 三昧などという。心を一つの対象に集中させて動揺を静め、平穩に安定させること(『岩波仏教』四一七頁)。涅槃 = 煩惱がきえた安らぎの境地。悟りの境地。究竟 = 至極の安心立命のところ。(『禅学』二四五頁)

(荒木龍太郎)

(二〇二二年一月三十一日)